見本

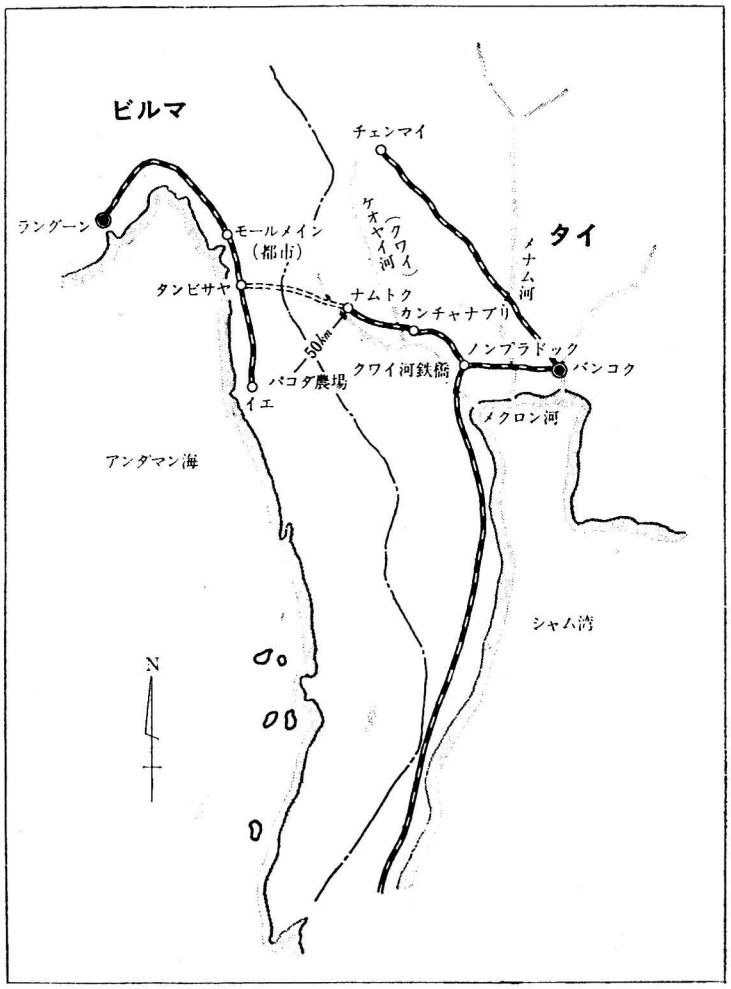
見本

第二次 クワイ河医学踏査隊

報　告　書

Report of The Second Investigation on Pagoda Farm in Thailand

1 9 7 2



Medical Missin to The River Kwai

OKAYAMA

目　　次

第Ⅰ部　　序
C.H.Yup 氏よりの挨拶 …… 4
学　長　挨　拶 …… 5
医学部長挨拶 …… 6
顧　問　挨　拶 …… 7
隊　長　挨　拶 …… 8
隊　員　名　簿 …… 9
行　動　記　録 …… 10
踏　査　行　程 …… 11
医学調査計画 …… 12
第Ⅱ部　　調　査　報　告 …… 13
現　地　概　況 …… 14～15
伝染病調査報告 …… 16
寄生虫調査報告 …… 17～21
環境調査報告 …… 22～23
環境調査写真集 …… 24～27
パコダ農場概略図 …… 28～29
血色素に関する調査報告 …… 30～32
日本脳炎血清抗体価に関する調査報告 …… 33
アカタラセミアに関する調査報告 …… 34
健康診断に関する調査報告 …… 35～36
Mon Races 健康診断調査結果表 …… 折込
反　省　と　展　望 …… 37
第Ⅲ部　　大　学　視　察　記 …… 38
シリラート医科大学視察記 …… 39～40
マヒドール大学熱帯医学研究所視察記 …… 41～42
ペナン大学にての交歓記 …… 43
シンガポール大学視察記 …… 44
Outram Road General Hospital 視察記 …… 45
台湾大学医学院視察記 …… 46
第Ⅳ部　　写真による記録 …… 47～60
第Ⅴ部　　そ　の　他 …… 61
隊員の健康管理について …… 62
会　計　報　告 …… 63
援助者名簿 …… 64～65

第Ⅰ部　　序

あ い さ つ

パコダ農場指導者　C.H.Yup

7—8—72

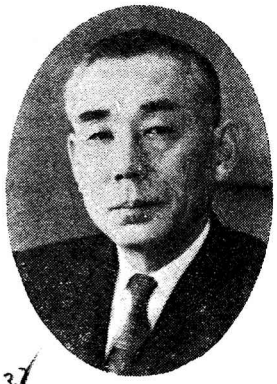
Dear Mr.President and Mr. Dean,

Indeed, I must congratulate you for the success of the Second Medial Mission to the River Kwai. I must say that both food and accommodation are inadequade for the Japanese standard. Moreover, the weather has been deplorable. It has never been friend of the Mission at all. However, the Mission has fought through well and won the hearts of the people here.

Hearing the presence of the Mission, the Magistrate himself came and stayed for two nights with the students and appreciates their works greatly. He promised me to do all he can to see that future missions will enjoy better facilities. This convinced me that people here are realizing the importance of the Mission's works.

Lastly, let me assure you that the Mission has done its works and missions of the like are welcome here whenever and by all.

On behalf of Pagoda Farm and the people nearby, let us express our affection of your university and especially, this Mission.



序　文

岡山大学長

谷口澄夫

去る7月26日午後2時5分発の「ひかり68号」で出発する第2次クワイ河医学踏査隊を，岡山駅頭に見送った情景がいまなお瞼に去来する。微生物学教室金政助教授を顧問として，隊長菅波君ほか23人の一行は，恙なく所期の目的を果たして帰国し，ここにその報告書を作成するという。私は帰国報告をつぶさに聞き，諸君はよくやった，その意義は大きいと，改めて心からよろこびの意を表したい。諸君が現地からの土産として持帰ってくれた象の木彫を，この上ない記念として学長室に飾っている。

岡山大学の教官・学生を中心とする一団が，タイ国カンチャナブリ県クワイ河流域の奥地にあるパゴダ農場を訪れるのは，今回で3度目である。第1回は農学部園芸学教室益田教授を隊長とする農学踏査隊，第2回は菅波君を隊長とする医学・邦楽混成隊であった。この2度にわたる実績によって，岡大とクワイ河地域との国際的な関係は漸く修理固成されたところへ，諸君の今回の壮挙である。しばしば批判の的となっている我が国の東南アジアへの貪欲なまでの経済進出に比して，諸君の目的は異質のものであり，現地住民の切望に応えるものであったと確信する。岡大広報 No.15に金政助教授が寄せられた「活動報告」は，そのことをわれわれに教えてくれている。

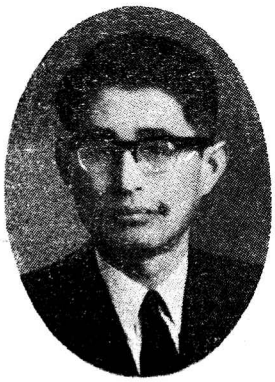
平和を基調とした国際文化が，最近とくに強調され，我が国においても種々の企画や施策が講ぜられるようになった。かねてより国際間の相互的な理解・援助ないしは学術文化の交流を重視してきた私はタイ国クワイ河地域への踏査隊の派遣に対しても重大な関心を抱いてきたし，今後もこの種の対外活動に協力を惜しまないつもりである。そして，今回の成果を土台として，更にこのような有益な事業がいっそう発展することを希っている。

諸君はパゴダ農場での医学的な活動のみでなく，広く東南アジア各地を歴訪して見聞をひろめたことであろうし，もろもろの大学・研究所および病院などを視察して，未知の世界を発見するとともに，自己を開眼して啓発するところも大であったろう。これらの貴重な体験が，多くの方々の理解と善意に支えられていることを忘れないでほしい。パゴダ農場主ヤップ氏，倉敷在住の日泰親善家である永瀬隆氏その他，両国の関係諸機関の方々の並ならぬ好意に報いるためにも，若々しいボランティアとしての精神に徹するように祈ってやまない。

タイ国クワイ河医学踏査隊の成果を祝して

岡山大学医学部長　妹尾　左知丸

1972年初め，岡山大学医学部の有志学生諸君を中心として，タイ国クワイ河地区医学踏査隊が再度結成され，多くの困難を克服して今夏見るにその目的を達成され，多大の成果を収めて帰学されたことは全く喜ばしい限りです。今や日本は名実共にアジアの先進国として他のアジア諸国の文化の発展に尽くすべき立場にあると信じます。私達のこの責務が学生諸君によって推進の端緒を開かれたことを限りなく嬉しく思います。本年は微生物の金政助教授が随行され，現地における医学調査の指導のみならず入国時の不慮の事態の処理に当られ，又タイ国の大学及び病院と岡山大学医学部の間に，学術交流と親善の基礎を作る為に学生諸君と共に大いに活躍していただいた事は高く評価さるべきことと存じます。岡山大学としても既に学術交流振興会が結成され海外との文化交流の機関としてその活動が期待されている折柄今後は医学部をあげて海外との学術交流に積極的に取組んで行く方向で微力を尽くしたいと考えます。皆さんもアジアに於ける日本の立場を自覚され今後益々努力を重ねられる様，切望します。



あいさつ

顧問　金政泰弘

年の瀬も迫り，何かと気ぜわしい今日この頃でございますが，皆様には益々御繁栄の御事と心からお慶び申し上げます。

当初の計画では稲臣教授が顧問として出張される予定でありましたが，健康上の都合から急に私が行く事になりました。7月27日日本を出発し，タイ国カンチャナブリ県クワイ河流域の医学調査を行い，又東南アジア諸国の各大学附属病院を訪問し一行は全員無事で8月20日帰国致しました。私の出張が急であった為，心その他諸々の準備も不充分で不行き届きな顧問では御座居ましたが大過なく日程を終える事が出来ましたのは，一重に皆様方の絶大なる御援助と御鞭達の賜と厚く御礼申し上げます。又隊員一同が初期の目的を達成すべく，終始献身と友愛の精神をもって事にあたって呉れた事も見のがす事は出来ません。パゴダ農場は医師皆無の閉鎖社会であるだけに現地人の我々に寄せる期待は大きく，一方我々にとっても興味ある症例が少なからずあり，学生達も熱帯医学に関して研修の実を上げ得たと自負している次第です。又帰途にあたり東南アジア各国の大学，病院を訪問し各大学の学生との交流を行った事は，お互いの親善を深める上に，又隊員一同の国際的視野を深める上に大いに役立った事と思います。

最後に本隊に御援助，御後援を賜った皆様方に拝眉の上お礼申し上げるのが本意でございますが，この紙面をかりまして深甚の謝意を表させていただきます。

あいさつ

隊長　菅波　茂

文明の花咲き乱れるバンコックからブーゲンビリアの咲くパゴダ農場に私達が着いたのは雨季も激しい7月29日でした。

微生物学金政助教授，寄生虫学村主助手の指導のもとに，すでに活動を始めていた現地保健委員会の協力を得て，熱帯病を中心とする医学調査活動を行いました。これにより現地の医療事情が更に明らかにされ，この無医地区医療水準向上のため，現地保健委員会の取るべき進路がより一歩進んだ形で具体化されるにいたりました。

医療機関の絶無であるクワイ河地区において，この保健委員会の成長とその保健センターの存在が果すべき役割を考ると，一層の育成強化の必要性を痛切に感じざるを得ませんでした。

発熱，下痢があたりまえのジャングル生活において，隊員が10日間という日数で精神的肉体的に限界を示し始めた事実に裏がきされる苦闘がかの民族との接点を拡大し又精神的連帯感を強めました。角度をかえてみれば，真の国際交流に果している大きな役割を評価したく思います。今後もこの目的のために第三次第四次とひきつがれていくことを願うものです。

末筆ながら，私達の活動に深い御理解と暖かい御援助をくださった方々に感謝いたします。

135

隊　員　名　簿

顧　問	金　政　泰　弘	岡山大学医学部　微生物学教室　助教授
教　官	村　主　節　雄	岡山大学医学部　寄生虫学教室　助　手
	田　中　義　郎	旭丘病院　検査部長
隊　長	菅　波　　茂	岡山大学医学部　公衆衛生学教室　大学院生
副隊長	福　本　　悟	岡山大学医学部　専門課程　3年生
隊　員	武　　誠	岡山大学医学部　皮膚科
	忠　田　正　樹	〃　精神神経科
	鶴　見　哲　也	広島東洋工業病院　内　科
	坪　田　信　孝	岡山大学医学部　専門課程　3年生
	長　櫓　　功	〃
	柳　生　史　登	〃
	藤井　万寿子	〃
	工　藤　　基	岡山大学医学部　専門課程　2年生
	松　井　知　子	〃　〃　〃
	中　津　武　志	岡山大学医学部　進学課程　2年生
	松　本　健　吾	〃
	中　山　愛　子	岡山大学医学部　附属看護学校　3年生
	梓　子　孝　江	〃

クワイ河開発協力隊よりのボランティア

牛　尾　　茂
岩　永　文　夫
黒　住　典　子
藤　岡　富美子
新　見　利茂子

日本国際医療団「医療協力」編集長

内　藤　　修

日　　程

＜ 行 動 記 録 ＞

7 月 26 日 9999 岡　山 → 大　阪

27 日　大阪→バンコック

熱帯医学研究所長　チャムロン・ハリナスター氏パゴダ農場指導者C.H. Yup氏と打合せ日本大使館へあいさつ

THE.NATIONAL　RESERCH　COUNCIL へ第3次の医療調査申請書を取りに行く

28 日　バンコック→カンチャナブリ　バスにて午後出発

29 日　カンチャナブリ→パゴダ農場　汽車にて午前五時出発

30 日　日中は各調査のための準備と農場指導者との打合せ　夜は交歓会　民族舞踊を観賞す　少林寺拳法，民謡，尺八を披露する　最大の目的は住民の調査への協力要請にあった。

31 日　調査活動開始

1 日　活動終了後　熱帯医学研究所員Seree氏のタイ国におけるフィラリアの現状に関する講義

2 日　簡易水道の試験的施設　活動終了後　医師団とパゴダ農場保健委員会とのカンファレンス

3 日　金政先生諸々の用事のためYup氏とバンコックに帰られる

4 日　活動はなく休息日，小学生との交歓会で小学校を訪問

5 日　活動終了後，全隊員とパゴダ保健委員会とのカンファレンス

6 日　活動終了後，地区司令官並びに彼の兵達と交歓す，大いに飲み踊る

7 日　整理，夜，現地の指導者達と「お別れパーティ」来年の再会を約束す

8 日　パゴダ農場→カンチャナブリ→バンコック

9 日　休　息

10 日　午前中，シリラート医科大学視察，午後マヒドール大学熱帯医学研究所視察，夜シリラート医科大学生との交歓会

11 日　バンコック→ペナン　ペナン大学日本語教師町田嬢と打合わせ

12 日　ペナン大学視察，日本語教室の学生達と交歓

13 日　ペナン→クアラルンプール

14 日　休　息

15 日　クアラルンプール→シンガポール　隊員の1人がデング熱らしきもので発病隊長と共にマレー大学医学部附属病院に残る

16 日　シンガポール大学医学部視察

17 日　シンガポール→ホンコン

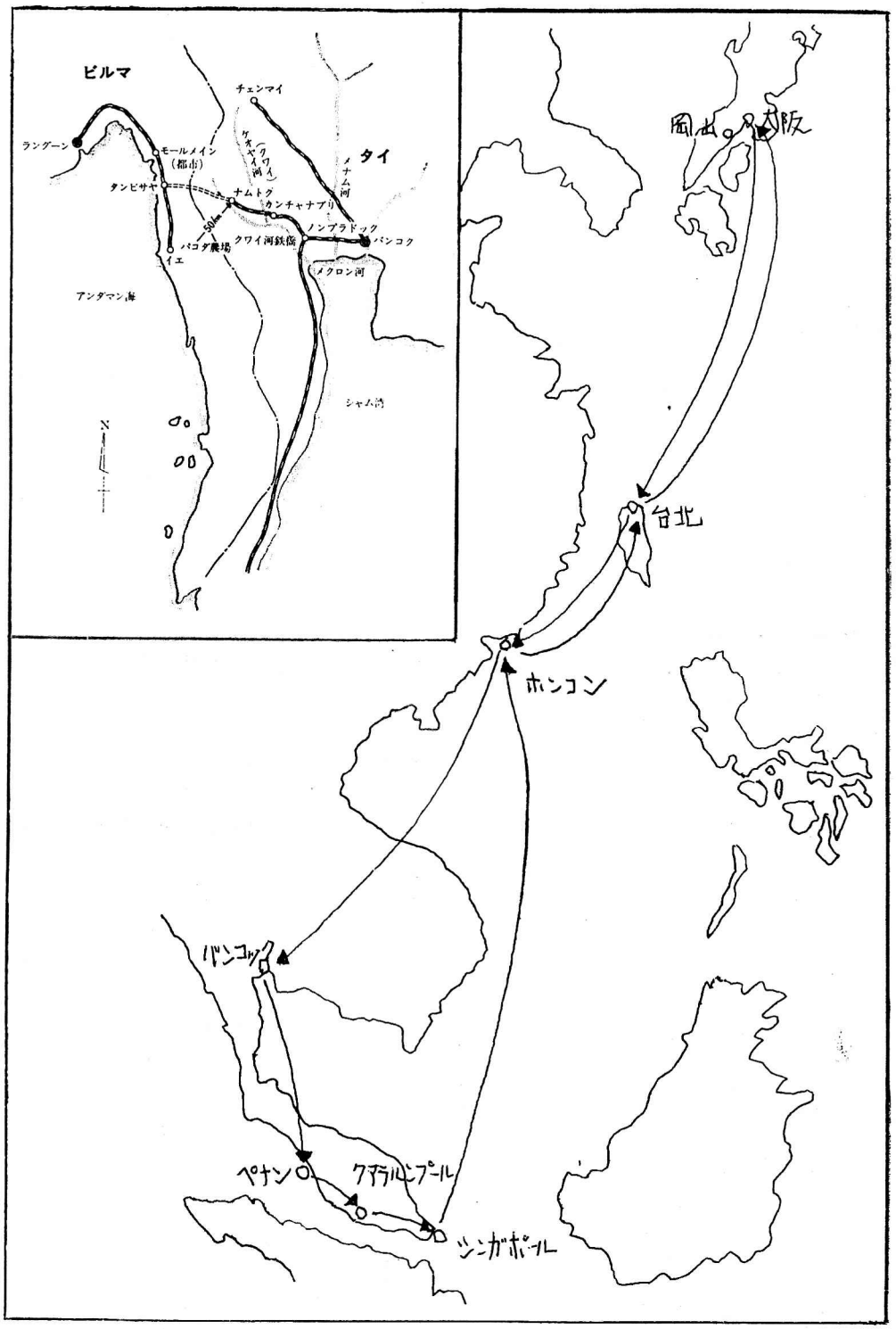
18 日　ホンコン→タイペイ

19 日　台湾大学医学部視察

20 日　タイペイ→大阪→岡山

25 日　隊長と1隊員遅れて帰国

踏　査　行　程


ビルマ
チェンマイ
ラングーン
モールメイン
(都市)
タンビサヤ
ケオ
ヤク
イワイ
河
タイ
メナム河
ナムトク
カンチャナブリ
500
パコダ農場
クワイ河鉄橋
ノンプラドック
バンコク
イエ
メクロン河
アンダマン海
シャム湾
N
岡山
大阪
台北
ホンコン
バンコック
ペナン
クアラルンプール
シンガポール

医 学 調 査 計 画

〔概要〕

タイ国クウイ河無医地区パゴダ農場保健委員会※1が昨年発足したが，その医療及び保健衛生については，多くの改善すべき点を含んでいる。又，当地区における疾患は劣悪な生活条件に起因するものが多く，農民全体の生活水準の向上によって，解決を期待し得るものである。よって私達の，住民の健康状能についての医学調査は，総合的農村開発の一部門として意味を持ち得るものであることを深く認識し，その方向に展開されることを確認する。

〔調査項目〕

1．消化器疾患

消化器疾患が，タイ国農民における死亡原因の第一位をしめしており，本疾患中，最も頻度の高いのは，消化器に於ける感染症である。すなわち，清潔な水に乏しい熱帯地の農民にとって，消化器感染に基づく下痢による脱水症状は，常に生命の危険を伴うものである。本症は住民の生活様式と関連し，社会学的意味からも，極めて重要な問題であるので細菌学的及び寄生虫学的調査を試みた。

2．貧　血

蛋白質や鉄分の摂取量の不足により起因される貧血のみでなく，寄生虫感染による貧血等も含めて，その調査を行なう事を目的とする。

3．栄養障害性疾患

特に農民の生活においては，食生活に起因するこの種の疾患の意味は大きく，今回は，蛋白'ビタミン欠乏症を特にとりあげて調査する。

4．性　病

性病の蔓延は，近時わが国においても欧米においても，問題になっているが，タイ国における性病の頻度の高い実態は，ゆるがせに出来ない重大さを示している。そしてパゴダ農場保健委員会より最近の便りに於ても，その事情を物語っている。それ故，本症の保有率の検査を，今回の調査に加えた。（調査報告は第三次報告書にて）

5．尿検査

パゴダ農場保健委員会が，将来その医療及び保健衛生について，充分な能力を発揮する時に備え，肝疾患，腎疾患，糖尿病のスクリーニングにより，データを集積し，その参考にする。

6．日本脳炎

日本脳炎のかつての蔓延地である岡山よりの調査団としては看過できない。この疾患の有無について，免疫学的に調査を行なう。

7．遺伝的疾患

高原氏病※2として確認された無カタラーゼ症の当該地区における遺伝子頻度の分布の実態調査を今回より開始し，東南アジア諸民族の特異性について調べる。

※1．昨年の第1次クワイ河医学踏査隊のもとに，クワイ河無医地区パゴダ農場において組織された，住民を主体とした医学・保健衛生を司どる委員会で，クワイ河医学踏査隊と緊密な関係にある。

※2．無カタラーゼ血液症にあらわれる歯齦部にはじまる進行性壊疽性潰瘍

第Ⅱ部　調査報告

現地の概況　　菅波　茂

第一次踏査隊で明らかな如く東南アジアにおける医療の貧因は生活の貧因に根ざしている。この貧因と医療の関係を問いつめる時，総合的農場開発の一環としての医療改善という命題が生じてきた。この点を重点にして医療教育，経済の三方面について述べてみたい。

I　医療に関して

驚くべきことに，昨年の第一次クワイ河医学踏査隊の残こしたわずかな資材をもとにして保健センターが設立され，ランゲーン大学化学科出身のメモン青年と3人のアシスタントにより小規模ながら住民の健康管理がなされていました。指導者C.H.Yup氏の自からの「健康は自らの手で守らざるを得ない」という理解のもとに，抗生物質を含む多種類の薬品が備えられていた。彼等は英語の原書の独学により医学の知識の吸収に努めていましたが，それなりの限界を感じていたようです。

彼等の最大の任務はマラリア対策にあり，新しくビルマから来た人達に抗マラリア剤の投与をも行なっていました。マラリア患者に輸液療法を行なっていたのも興味ある事実でした。しかし私達の調査により明らかにされたのですが，住民の90%以上が感染している鉤虫，蛔虫などの寄生虫疾患にはほとんど無関心でした。

最後に重症患者について述べましょう。保健センターに行くことのできない遠距離の重症患者は委員会の眼にふれることもなく彼の小屋でひっそりと死を迎えています。よしんばふれた時でも目の飛び出るほど高額の治療費を払ってカンチャナブリの県立病院かバンコックの病院に送り込むことしかできず委員会としても打つ手がないようです。したがって，この対策は今後の大きな課題となるでしょう。

II　教育に関して

保健委員会とその保健センター運営の質的向上及び拡大のためには，それを基礎づける教育の必要性を無視するわけにはいきません。パゴダ農場ではいかなる教育が行なわれているのか。次に内藤修日本国際医療団職員の報告を引用してみます。

「教育は，種々の困難な条件を考えると，非常によくやっている印象を受けた。まず部落の子供たちは6才から10才まで小学校に通う。小学校は木造の4教室からなる建物で，3人の先生がいる。この先生達は，モン族でなくタイ国国境警備隊で，農場に寝泊りし，本来の仕事のほかに小学校でタイ語を教えている。授業といっても教材が地球儀のほかほとんどなく，タイ語の読み書きだけである。一応全農場の子供達が通わなければならないらしいが，種々の家庭的制約があって，対象約90名の子供のうち，常時通学児童は65名前後とのこと。小学校の授業時間は午前7時から午後3時まで。

小学校に近接して寺院がある。この寺院はいわば中学校的な存在である。小学校卒業者と高学年の児童が僧侶からモン語と英語の授業を受けている。英語の授業は今年から二人の僧により始められたということだが，すでに片ことの英会話はできるくらいになっていた。一応年限は3年とのこと。

一方，モン語は民族固有の言語であり，やはり僧侶が熱心に教えていた。モン語の学習期間はかなり長期にわたって行なわれている。教育は，児童でだけでなく青年層に対しても行なわれている。昼間の労働の後，夜，食堂に使われている集会場で，20名近くの青年達が英語の授業を真剣に受けている姿は印象的だった。

全般的にいえることは，語学教育だけで，理科系の授業が全く行なわれていないこと。設備が非常に悪いこと。例えば，寺院の授業は，暗い本堂で，机も椅子もなく，座ったり寝そべって授業を受けてい

た。小学校の先生は国境警備隊であり，寺院では僧侶というごとく教授陣が不安定であること。にもかかわらず，教育をかなり重視している印象を受けた。パゴダ農場では高等教育が受けられないので小学校卒業後ナムトクに行って授業を受けるとのことで現在男２名，女１名がいるという 。」

以上が内藤氏の教育に関するレポートでありますが，この事実は次の２つの暗示を与えます。

1）　公衆衛生活動に対する住民の理解の促進

2）　保健委員会と保健センターの住民主体による運営の可能性

Ⅲ　経済に関して

保健委員会とその保健センターの運営費は当然，農場自体の出費になるわけで，その規模は農場の経済状態と密接な関係にあるといわざるを得ません。これについては内藤氏の報告がありますので，引用してみましょう。

「パゴダ農場の大きな経済基盤はココナツの栽培にある。その耕作面積は3600ライアス（１ライアスは1600平方メートル）といわれ，その他の陸稲，綿，トーモロコシ，トーガラシ，カボチャ等を含めた全耕作面積の約半分を占めている。ココナツからの収益は，たとえば，40本から１日100バーツ（1500円）という勘定だが，現在45000本を植えており，うちすでに1500本が成熟している。

ヤシを含めた全耕作物から年間収益は75000ドルと聞いた。パゴダ農場の全人口は1225名というから，１人当りの年間生産高は約60ドルである。なお労働人口は350名前後である。

一方，支出（農場経営費）は年間150000ドル。したがって年間75000ドルの赤字である。この赤字分は，農場の所有者であるヤップ氏がバンコックで経営している「トーマス・フィリップスカンパニー」という貿易会社からの収益をあてている。支出の内訳けは，純然たる農場経営費として7500ドル，その他治安や複雑な民族問題に対する費用として75000ドルという。こうみてくると，赤字率はかなりの額になるが，農場の首脳部は割りに楽観的である。というのは，あと４～５年たてば，４万本のココナツが成長して，その収益がかなり見込まれるからであろう。

注目したいのは，ヤップ氏と一般住民との関係である。農業においては，土地制度が大きな問題であるが，パゴダ農場の土地は国有地で，ヤップ氏が毎年税金を支払っている。実質上は彼の私有地のようなものである。農場の人達はヤップ氏の耕作地で働き，代償として食糧と衣類等の他に，月給250バーツ（約3800円）を受け取る。このような月給制のほかに，希望者には必要に応じて，ヤップ氏の所有地を貸与えある程度自由に耕作を許しているようである。耕作費として年間2000バーツ（30000円）程度を貸し，収獲時点で返済させる。地代の必要性はない。現在は農場全体が非常な赤字のためヤップ氏の経済力が大きくものを言っているので，住民の間でこの土地制度に対して不満は見られない。しかし，ヤップ氏の地主的存在は，将来農場の経営が黒字に転化した時にひとつの問題になるかもしれない 。」

以上の報告より今後５年間を保健委員会とその保健センターの運営の基礎固めに努力し，５年後の経済状態好転の時点で経済的基盤に支えられた種々の医療活動を展開するといった展望も見い出されるでしょう。

最後に貴重なる資料を下さった日本国際医療団の内藤修氏に厚く御礼申し上げます。

反省と展望

菅波　茂

私達は今回，公衆衛生，寄生虫，微生物学の三方面にわたって，タイ国クワイ河無医地区パゴダ農場保健委員会と合同調査を行なったわけであります。東南アジア少数民族の自主的医療委員会による保健センター設立運営の理念のもとに，私達の活動の位置づけと展望を述べてみたいと思います。

私達の実施した集団検診は健康管理計画における一構成要素として行われました。即ち

1，Case—finding　　2，集団の疾病傾向

について，健康管理上の問題点と打つべき対策の指針のための情報獲得としての意味を持った。しかし次の根本的な2点については短期滞在しかできない第3者の立場の限界を認めざるを得ませんでした。

1，現地のneedは何か，

2，短期調査活動が保健に対する認識を深め，住民の自主的な保健活動をより一層推進する動機づけの機会になり得るか。それを裏づける具体例を述べてみたい。

「私達は消化器伝染疾患対策として試験的に3ケ所に簡易水道を施設した。しかし現地住民は従来の細々皿洗いを小川の流れで済ませてしまった。」

彼等にしてみれば，小さな容器に柱をひねって何回も水をくみかえての皿洗いは，いかにも不便な事であろうかと思われる。健康管理のための各対策を現地の風俗，習慣に無理なく溶けこますにはどうしたらいいのか。又，このことは同時に，貧しい経済的基盤で最大効果を上げなければならぬという農場の命題からも要求されることでもある。

もっぱら，衛生教育活動の重要性が浮び上ってこざるを得ません。そのためには現地のneedを充分把握した上での地味な息の長い活動が予想されますが，衛生教育活動推進の可能性を3点について述べてみたいと思います。

1，保健委員会について，

概略は「現地の概況」の項に記していますが，四人の青年達にとって，この仕事はSide—businessであり，本格的に取り組める組織としての背景がないのが弱点です。農場の制度として彼等の地位と役割を位置づければ，保健委員会の委員として健康管理に専念できる可能性があります。踏査隊との関係に於いてその役割を明確にしてゆくことが今後の課題に思えます。

2，その他の青年

彼等は労働の後，夜，英語の学習に非常に意欲的に取りくんでいます。将来，四人の保健委員会による三千人の住民の健康管理の補助員としての役割を果す可能性が考えられます。

3，農場の特性，

月給制のため，おおまかに住民の動向をつかんでいますが，これを徹底させば健康管理に欠くべからざる住民の動向が完全に近いまで把握できそうに思えます。

以上の展望をふまえて，私達は次のような構想を考えています。

1，主体となる保健委員会の制度化

2，踏査隊と保健委員会の合同調査活動により，保健委員会の技術研修と，私達の持ち込んだ資材による保健センターの設備拡張をはかる。

3，保健委員会による年3回（暑期，雨期，乾期）の住民の自覚症状検査の実施，これにより次期合同調査計画のための予備調査と住民のneedをつかむ。

4，住民の戸籍票の完備，これにより，出産，死亡，結婚など人口動態の実態をつかみ公衆衛生学的活動の基礎にする。

5，Mr，ソモト（元日本軍所属）による日本語教室の開設，これにより，2～3名の日本語会話のできる人を養成し，今後の活動の運営を容易にする。これらの構想をより吟味しながら，今後の活動を進めて行きたい考えであります。

バゴダ農場の全景

中央の林が水源となっている灌林。その上方一面にあるのがココヤシ畑で，その向うはジャングルである。林の下，右半分が陸稲畑，左手の白い建物は右側が僧院，左側が学校である。遠く簿く見える山はビルマとの国境である，クワイ川はその手前の山すそを流れている。

<パゴダへの道>

国境地帯のジャングルは雨季の最中でした。トラックの荷台からおりて泥まみれになってトラックを動かしてはバゴダへ，バゴダへと向いました。

＜パゴダの風景＞

1.ヤシと家

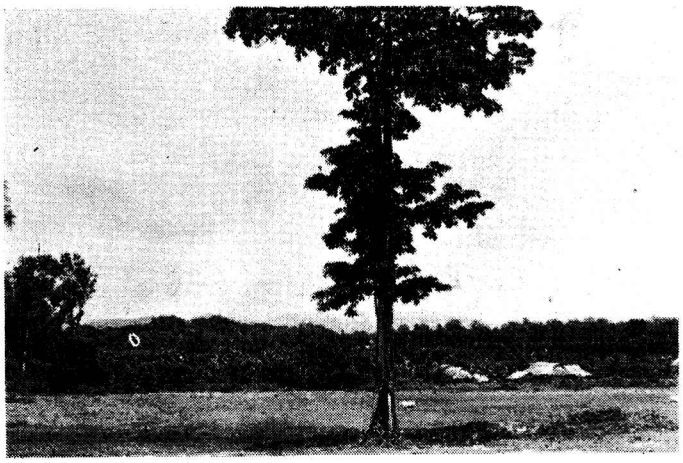
ヤシの葉で屋根をふき壁は竹からなる高床式の家。１ＤＫか２ＤＫである。

2.ヤシの実

10年前に植えられたヤシに念願の実がなった。農場経済の基盤であるヤシの実が!!

3.農場の一本チーク

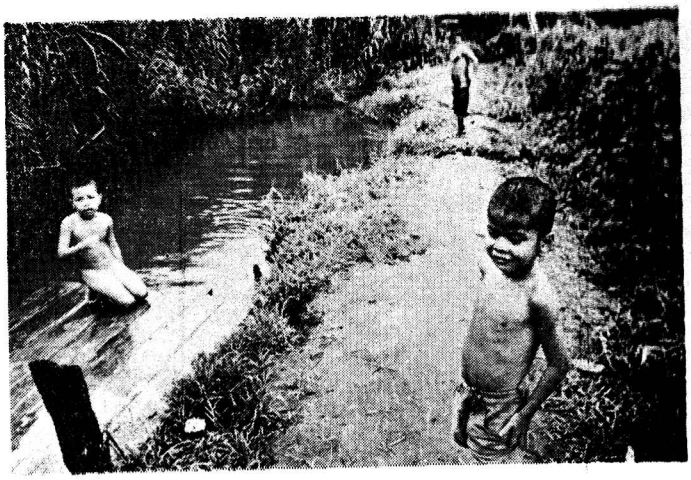
山のむこうにはビルマがある。今日も山を越えて，生活を求めて人が来る。



＜パゴダの風俗＞

1.水　浴

小魚が体の横をスイスイと泳いでいく。のどかなのどかな風情を味わった。



2.姉　妹

畑仕事からの帰りであろうか。なんともいえない色っぽい目つきであった。

3.せんたく

性道徳のきびしいパゴダでは独身ならばせんたくも自からゴッシゴッシやらざるを得ない。

4.パーティ用のブタ

こんがりやけた耳は客に対する最大のもてなしである。

5.炊　事

ほとんどの副食品がヤシ油でいためられていた。これがジャングル料理の粋である。

6.独身寮用食堂

食事になると手に手に皿を持って集まってくる。その皿は部屋にあっては唯一の調度品でもあった。

＜パゴダのひと＞

1. 妻と子

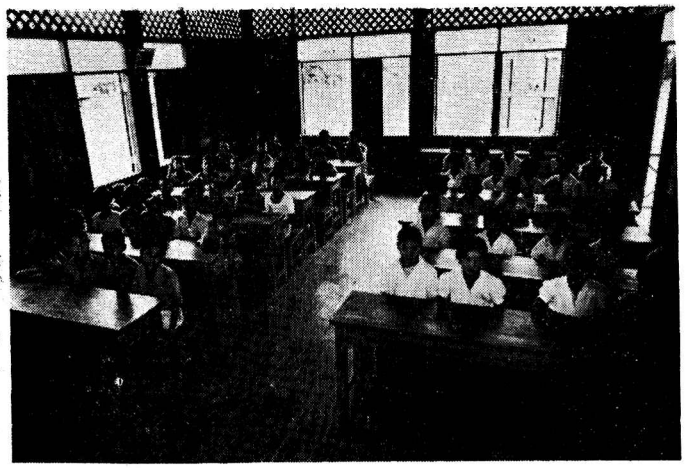
後ろにゆりかごがみえる。
夫は農場事務所で副農場主
Bau 氏の補佐をしている。

2. 乙女

モンの民族衣装をまとっている
彼女の最高のおしゃれでもある。

3. 娘達

向って右よりモン，インド，カレンの娘達。
学校では仲よく机を並べている。



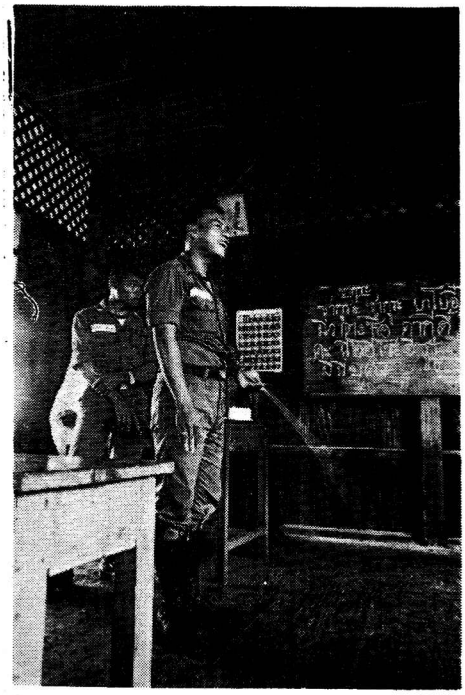
＜パゴダの教育＞

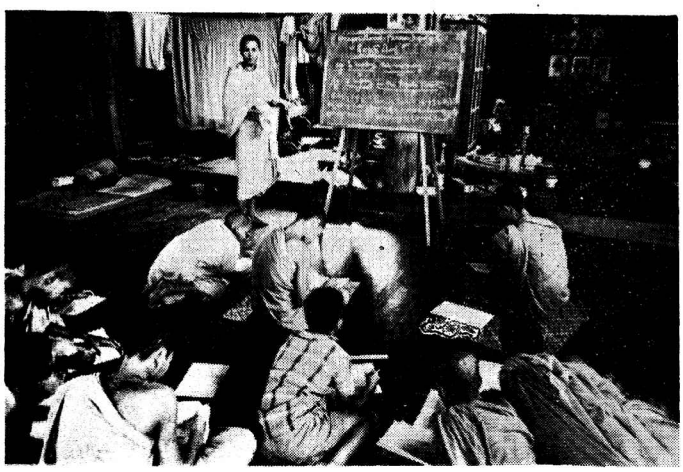
1.小学生

ほぼ90名，タイ語の読み書きが主でタイ人としての教育を受けている。

2.先　生

タイ政府派遣の国境警備隊員。授業のかたわらビルマ国境をひかえた農場周辺の警備にあたっている。





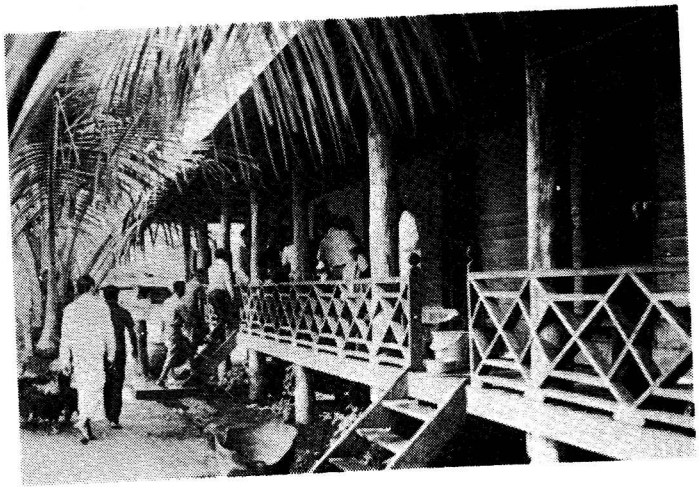
3.僧侶による教育

民族固有の言語であるモン語と英語が寺院にて教えられている。

＜パゴダの医療＞

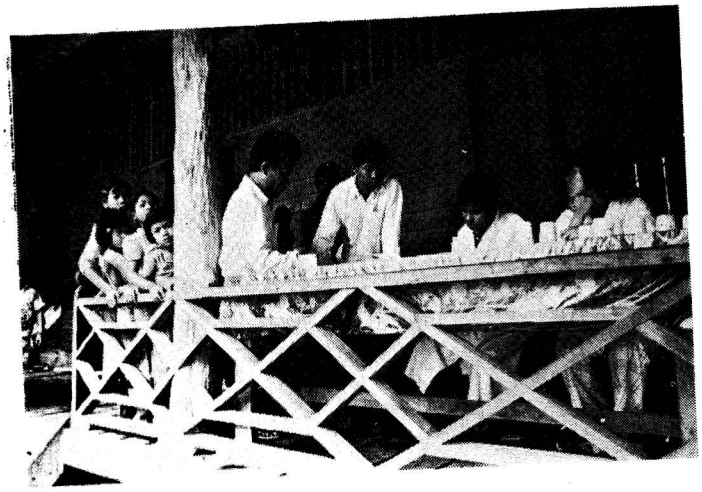
1.パゴダ保健委員会

昨年の第一次踏査隊の指導のもとに発足した。ラングーン大学化学科出身のMenOng君を中心に住民の健康管理に従事している。



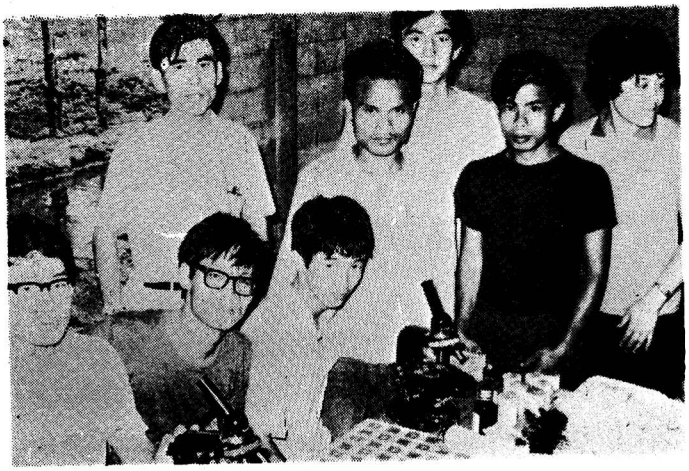
2.医務室

診療室(1)病室(4)から成る。抗生物質を含む多種類の薬品が備えられてある。保健委員会の青年たちの住居でもある。



3.保健委員会の活動

踏査隊と密接な関係のもとに今後彼等の医療活動は展開されるであろう。



＜医学調査活動＞

1.寄生虫検査

村主寄生虫学助手の指導のもとに行われた。暑さと臭いにいやはや大変であった。

2.健康診断

モン語での簡単な問診はできるようになったが，言葉の偉大さをつくづく味わった。

3.細菌学検査

微生物学金政助教授指導のもとに行われた。右端の Mr.Seree は熱帯医学研究所から派遣されたフィラリアの専門家である。

4.マラリア検査

マラリア対策は保健委員会の主活動の1つである。農場の指導者C.H Yup氏もこれにかかったことがある

5.順番を待つ人達

昨年と同じく晴れ着姿で人々は集ってきた。モン，ビルマ，カレン，インド，といろんな顔があった。

6.日本脳炎，血色素，アカタラセミア検査

隊長菅波（公衆衛生学教室）の指導のもとにクワイ河開発協力隊からのボランティアの協力を得て行なわれた。

＜交歓会＞

1.演奏者達

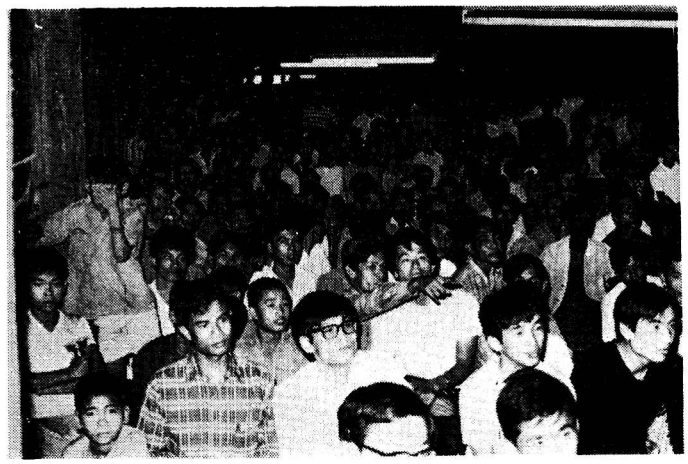
南インド音楽の影響を受けているメロディは雨季の湿気を払うが如く又それと一体となるが如くジャングルの闇に流れ出た。

2.踊り子

村の舞踊団である。幼い色気をふりまきながら豊作を願う踊りを披露してくれた。

3.集う人達

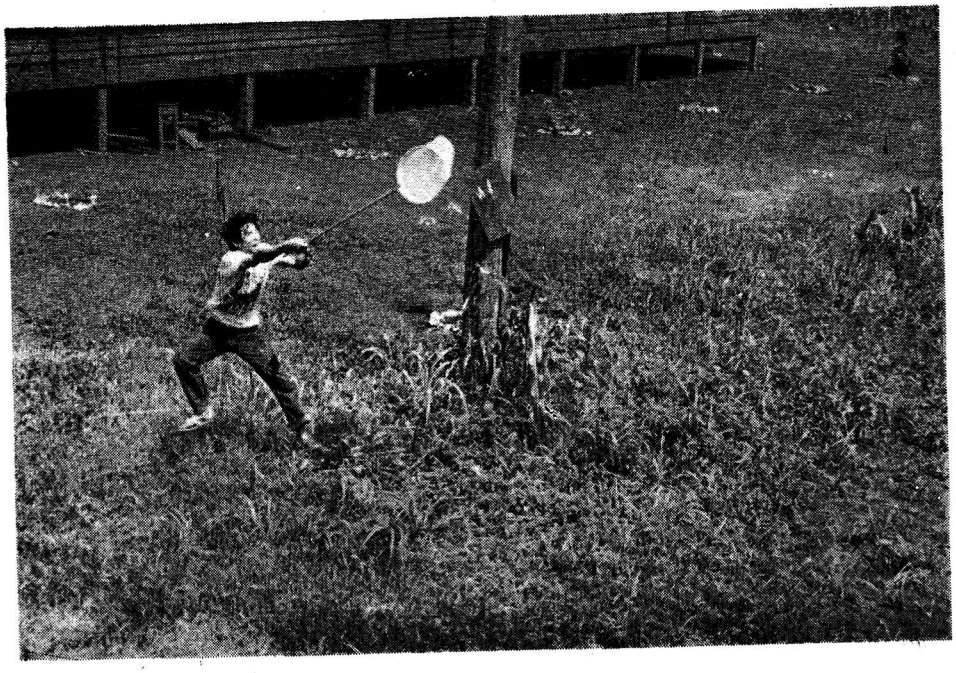
私達は，歌・尺八・少林寺拳法を紹介。へんね長調の歌に，拳法のダイナミックな大技にと人々の拍手がわいた。



＜寸　暇＞

1.魚釣り

環境調査も終り夕べのタンパク源確保を企だてる。



2.鶴見医師蝶を追う

クワイ河周辺は珍らしい蝶の宝庫であった。

≪再会を期して≫

農場の指導者と私達

第Ⅴ部　その他

隊員の健康管理について

武　誠　忠田　正樹　鶴見　哲也

我々医師団は，今回の旅行に際し，隊員が全員元気で無事に帰国することを第一の任務と考え，隊員の健康を守るために，様々の医薬品を持参した。先ず，マラリア汚染地区に入りこむので，出発前より抗マラリア剤（クロロキン製剤）をすべての隊員に服用してもらいつつ旅行を続けた。さらに旅行中，各自に，毎日の体温および下痢の有無をチェックしてもらった。我々は旅行中に発生するであろう疾患として急性感染症，下痢，感冒，などを仮想し，可能な限りの準備を行った。気候風土，食事が変ることもさることながら，事実感染の可能性も十分だからであった。先ずバンコックからパゴダ農場への2～3日間に腹痛，下痢を訴えた隊員が六名もあり，いざこれからという時期に，前途多難を思わせた。さていよいよパゴダ農場に到着してからは予想以上に夜が冷えたこともあり喉の痛み，咳，鼻炎などの感冒症状の訴えが目立ち，そのうち数名は，三十九度前後の発熱と下痢を伴い，臥床，点滴治療を施すに至った。原因は不明であるが二日程度の休養および抗生物質の投与などで全て全治した。誘因として夜の冷えこみ，降りつづく雨，日中の仕事の過労を考えるのが妥当であろう。パゴダ農場に滞在した期間中，感冒，下痢等を経験せずまったく異常のなかった者は，3～4名の状態であった。しかし幸いにして，ほとんど全員元気な状態にてパゴダ農場を出発できた。ところが，パゴダを離れて，約二週間後我々がクァラルンプールに居た時のことであった。この時点で，全員健康状態で旅行を続けていたのだが隊員の一人（女性）が，突然40度の高熱を訴え寝こんでしまった。下痢も感冒症状もなく，皮膚に発疹を認めるだけであった。我々は，すぐにマラリアを考えなければならなかった。潜状期も適当であったからである。我々は，相談の結果クァラルンプールの大学病院へ一人の付添いと入院させることに決定した。我々は，すぐに次の目的地へ出発しなければならなかったし，熱帯病は，現地の専門医にまかせた方が良いと考えたからである。大学病院の医師の話によると，テング熱，マラリア，レプトスピロージスが考えられるから，すぐ入院させろということであった。結果的には，診断はつかず，ある種のビールス感染症ということで一週間で回復し我々一行よりも遅れたが，元気に帰国した。以上が我々の経験した隊員の旅行中の疾患状況であるが，特発的な重態な急病であっても現地の病院へ収容し，治療が可能であったことは，特記すべき事であり，次回の踏査隊員の健康管理上，参考とすべき貴重な体験であったと思う。

会　計　報　告

1.収入の部

寄付金総額	1,240,000円
自己資金	44,701円
(総計)	(1,284,701円)

2.支出の部

装　備　費	210,000円
荷物移動費	185,000円
通　信　費	83,642円
渡航準備費	192,352円
公的土産物費	74,700円
写真記録費	95,000円
報告書印刷代	250,000円
血液検査費	38,000円
映写会準備費	22,200円
雑　　費	133,973円
(総計)	(1,284,867円)

3.残金　　-166円

援助者名簿

＜アイウエオ順＞

＜病院の部＞

赤木外科
赤松病院
浅野外科
井口会
生長診療所
池宗病院
今井哲
岩国国立病院内科医局
大浦医院
岡山回生病院
岡山記念病院
岡山協立病院
岡山済生会病院
岡山中央病院
岡山日本赤十字病院
岡山労災病院
奥島芳夫
奥橋褒
香川県立中央病院
香川労災病院
川田産婦人科
河田病院
河西外科
北山病院
城戸医院
琴海病院
倉敷記念病院
倉敷成人病センター
倉敷第三病院
倉敷中央病院
クワヤ病院
岡南病院
神戸西市民病院有志
国立岡山病院
西大寺仁泉会病院
坂出市立病院
榊原十全病院
佐野外科
重井病院
四国鉄道病院有志
下山内海病院
新宅俊昭
仙波上夫
高松病院
竹田勝美
立花明久
伊達外科
津山中央病院
当新田病院
同仁医院
東洋工業附属病院
富山産婦人科
長野病院
博愛会病院
林精神病院
林信広
東山病院
弘中満
福島外科
福渡病院
松岡病院
松田病院（倉敷市鶴形）
松田病院（玉野市和田）
真鍋小児科
丸之内病院
水島第一病院
水島協同病院
三井内科
三菱水島病院
三豊総合病院
三船病院
美馬恭一
宮武病院
宮本病院（倉敷市老松町）
宮本整形外科病院
本倉潔
森下喬之
尾島総合病院
山内正
弓山真弓
由良病院
粟林病院
岡山県医師会
岡山市医師会

＜学内の部＞

谷口学長
妹尾　医学部長
片山　学生部長
稲臣　教授
大月　〃　〃
緒方　〃　〃
木元　〃　〃
小坂　〃　〃
児玉　〃　〃
砂田　〃　〃
田中　〃　〃
谷奥　〃　〃
俵　〃　〃
岡島　助教授
岡崎事務長補佐
中野医学部事務局長
村川学生部課長補佐
黒田泰生
金子順子
岡山大学医学部
教授会
助講会
学友会
同窓会香川支部
〃　中予支部
〃　広島支部

＜行政の部＞

木村睦男
長野士郎
日本国際医療団
橋本龍太郎
白浜仁吉
外務省
文部省
岡山県東京事務所
岡山市長
岡山市議会議長

＜薬品の部＞

日本製薬団体連合会

大阪医薬品工業協会

エーザイ株式会社

三共製薬岡山出張所

瀬戸薬品株式会社

日水製薬株式会社

＜海外接渉＞

穂崎　巧

道田栄子

青野重夫

北路俊登

永瀬　隆

PITAKSANTI WONGPIROMSANTI

中村芳正

＜その他，一般の部＞

広栄堂　武田

サンケイ新聞社

山陽テレビ放送

山陽相互銀行

志ほや

スエヒロ岡山店

金政薬局

泰山堂書店

千葉食品

ナカシマプロペラ

松本組

福山園芸

ヤクルト岡山販売

山下体育社

山本製材所

両備バス

森田専一

熊代一男

長尾　寛

菊井立子

＜ロータリー，ライオンズ＞

岡山北ロータリー

玉島ロータリー

倉敷ロータリー

倉敷南ロータリー

高原　事務局長

岡山東ライオンズ

倉敷中央ライオンズ

倉敷鶴形ライオンズ

＜ 写 真 班 ＞

第二次クワイ河医学踏査隊報告書

編集責任者　菅波　茂　福本　悟

印刷年月日　昭和48年3月28日

発行年月日　昭和48年4月5日

印刷所　岡山市牟佐765 おかけい印刷部

踏査隊連絡場所　岡山大学医学部公衆衛生学教室　菅波気付

＜非売品＞　TEL 0862—23—7151 内線726